



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

Republic of Paraguay

— パラグアイ共和国 —

海外事情



南米の“へそ”



植田 信一 UEDA Shinichi
セントラルコンサルタント株式会社
海外事業部 / 技術部構造橋梁グループ / 主任技師

地球の裏側の親日国

「南米の“へそ”」と聞いて、皆様はどこを思い浮かべましたか？ ブラジルですか？ アルゼンチンですか？ どちらでもありません。南米大陸のほぼ中央に位置する内陸国こそが、ここで紹介する南米大陸の“へそ”、パラグアイ共和国です。では「パラグアイ」と聞いて、皆様は何が浮かびましたか？

サッカーファンにとっては、2010年ワールドカップ南アフリカ大会で日本とベスト8を争った国であり、2019年のコパアメリカでは決勝トーナメント進出をかけた、B組とC組の3

位争いで惜しくも得失点差で敗れた国。野球ファンにとっては、東京ヤクルトスワローズで活躍した岡林洋一選手の出生国（日系人移住地であるイグアス居住区出身）。ゴルフファンにとっては、日本ツアーでも活躍したカルロス・フランコ選手の国。さらに、文学ファンにとっては、村上龍の小説『パラグアイのオムライス』の舞台となった国など、何かと日本とつながりのある国です。

もっと日常的なつながりとしては、皆さんが食されているゴマの多くがパラグアイから輸入されているという事はあまり知られていない事実で

す。日系移民の方も多い事から、非常に親日的な国でもあります。私はこのパラグアイで多くの道路建設プロジェクトに参加してきました。ここでは、そんなパラグアイについてご紹介したいと思います。

広大な大地に少ない人口

パラグアイは南米大陸のほぼ中心に位置し、ブラジル、アルゼンチン、ボリビアと国境を接している内陸国です。国土は3本の国際河川であるパラグアイ川、パラナ川、ピルコマジョ川に囲まれています。国土面積は約40.7万km²で日本の約1.1倍であるのに対して、人口は約685万人と日本の1/18程度と、日本に比べるとかなり人口が少ない国です。

国土の開発が進んでいるのは肥沃な土壌を持つ東部が中心で、西部は依然として未開発な地域が広がっています。また、国土の90%近くが平地であるため、都市部を出ると地平線を見通せる程の広大な平地が広がっています。

パラグアイ川より西に位置するアルト・パラグアイ県、ボケロン県、プレシデンテ・アイエス県の3県を合



図1 南米大陸におけるパラグアイの位置

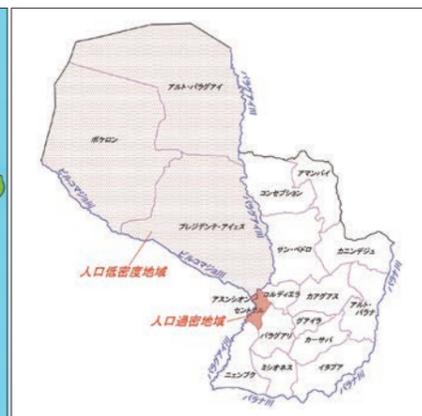


図2 行政区分と人口過密地域および人口低密度地域



写真1 大統領府をバックにした首都アスンシオンのロゴ。写真2 アスンシオン旧市街のビル群と古い教会。赤や白の花は桜に似たラパチョラグアイのインスタ映えスポットの花

わせると国土の約61%の面積を占めるのに対して、人口の3%程度しか生活していません。一方、首都であるアスンシオン県とセントラル県の2県には、国土の約1%の面積に人口の約40%が居住し、特に首都周辺は人口密集地域となっています。その首都アスンシオンでは近年、著しい交通渋滞が問題となっています。急速に発展して高層ビルが多く立ち並ぶ一方、旧市街地には古い建物も多く、その町並みは歴史を感じさせます。

2つの公用語

2004年1本の電話から急遽パラグアイに行くことが決定しました。私は2000年11月から1年間、中米ホンジュラス共和国で日本の無償資金協力の施工監理業務に従事。21世紀の幕開けはホンジュラス共和国で迎え、帰国後は国内業務に携わっていました。中米での業務経験がある事からか、私に白羽の矢が立ち、急遽パラグアイ行きが決定、あわただしくパラグアイに行くことになりました。

1年間のスペイン語圏での生活経験がある事から、少しはスペイン語を理解していました。しかし、現地

のTVニュースを見ていて驚きました。大統領の演説が全く理解できない。何かがおかしい。現地エンジニアに「今、大統領が話していたことが全く分からないのですが」と聞くと、「あれはスペイン語ではなくグアラニー語ですよ」と言われました。「グアラニー語で大統領が演説？」と疑問に思いましたが、パラグアイでは公用語としてスペイン語とグアラニー語があるため、両方で話されることもよくあるとの事でした。これが、初めてグアラニー語の存在を知った瞬間でした。パラグアイ人は、スペイン語とグアラニー語を混ぜて会話している事が多く、地方に行くとグアラニー語が主流になります。

南米初の蒸気機関車

パラグアイは南米で最初にスペインから独立した国で、南米初の蒸気機関車を導入した国でもあります。パラグアイ最古の駅であるサブカイ (Sapucaí) 駅跡地には、現在もなお、当時を思わせる蒸気機関車が放置されています。屋内には管理された綺麗な車両が保管されていたかと思えます。

実はこのサブカイ地区、私の思い入れのある地区なのです。2004年



写真3 サブカイ駅跡地に残る蒸気機関車

から4年間従事したプロジェクトで建設した道路は、このサブカイ地区も通過する事から、毎日のようにこの蒸気機関車を見ていました。あれから10余年が経過した2019年4月、再びこの地を訪れましたが、当時から何も変わらない蒸気機関車がありました。鉄道ファンにはたまらない場所かと思えます。南米初の蒸気機関車、最古の駅、これら歴史あるものをこれからも保存し続けて欲しいとつくづく思います。

道路ネットワーク

広大な面積を有するパラグアイですが、道路整備はまだ十分とはいえません。地方の多くの道路は、石畳舗装や未舗装道路(土道)です。ま



写真4 地方の未舗装道路。この写真撮影のあとに転倒



写真5 地方の石畳舗装



写真6 地方にある損傷が激しい木橋

た、首都アスンシオン市内でも少し路地に入ると、未だ石畳舗装のままの道路もあります。橋梁についても同様で、地方では木橋が多数存在し、その木橋を大型トレーラーが通過して物資の運搬が行われている状況です。

パラグアイの多くの地域は赤土です。未舗装道路ではひとたび雨が降ると、路面は氷上と同様につるつる滑り、コントロール不能に陥る事も多々あります。車だけでなく人間も同じです。私も、赤土の坂道を歩いて上っている際、完全にコントロー

ルを失い顔面から着地しました。幸い、ケガはありませんでしたが、作業服は真っ赤に染まり、洗濯しても落ちません。道路整備の重要性について身をもって感じた瞬間でした。

パラグアイの食文化

パラグアイの食文化で忘れてはならないもの、ソウルフードは、アサード(Asado)という豪快な焼き肉です。何かにつけて、人が集まるとアサードパーティーが始まります。ブロック状の牛肉を炭火でじっくり焼いて食べます。

前述した道路建設プロジェクトでは、サトウキビ畑のど真ん中の製糖工場が整備した小さな村で4年間生活しました。当時、一緒に施工監理業務に従事したパラグアイ人スタッフは最盛期には約70名、この小さな村で生活を共にしながら仕事をしていました。娯楽施設も何もありませんので、仕事が終わるとみんなでサッカーをしたり、バレーボールをしたりするしかありません。そのため、よくこのアサードを食べながら親睦を深めました。

パラグアイ人の肉の消費量はすさまじく、アサードをする際に購入する肉は500g/人で計算されます。最初のころは「多すぎでは？」との疑問もありましたが、終わってみるときれいに無くなっていて、その食欲に驚かされたものです。お酒を飲みながらチョリソ(ソーセージ)をつまみ、肉の焼き上がりを待つのですが、焼き上がりが深夜0時近くなることは普通です。私はお酒とチョリソで満足し、肉まで辿り着けず就寝という事も多々ありました。肉好きの方は、是非この本場のアサードをお試し頂きたい。

それともう一つは、チパ(Chipa)というドーナツのようなパンです。材料にアルミドン(でんぷん粉)、ラード、パラグアイチーズ、卵、牛乳、塩を使った高カロリーな食べ物で、おやつに良く食べられます。美味しいのですが、食べ過ぎると・・・想像できるかと思います。国道沿いに点在する露店のチパ屋さんでは、ミニスカート姿のおばさま方が販売しています。なぜそのコスチュームなのか、長年パラグアイを来していますが、その真相を確認した事はありません。



写真7 パラグアイのソウルフード「アサード」

テレレの文化

パラグアイを語るうえで忘れてはならない文化の一つがテレレ(Tereré)です。「テレレって何？」と言う方も多いと思います。ではマテ茶はどうでしょう。ご存知の方は多いと思います。テレレとは、このマテ茶を水出しで飲むお茶です。パラグアイでも朝晩や冬場の寒いときは温かいマテ茶も飲みます。

テレレの飲み方はマテ茶と同様に、木や牛の角などで作られたグアンパと呼ばれる容器に茶葉を入れ、先端に無数の小さな穴の開いた特殊なストロー(ボンビージャ)で飲みます。これを、みんなで回し飲みするという文化です。確かに最初は抵抗がありましたが、この回し飲みこそが、Amigo(友達)の証なのです。時には初めて会った方も回し飲みをします。このテレレが回って来る(一緒に回し飲みを勧められる)という事は、相手から信頼されたという証なのかもしれません。

Amigoの文化

パラグアイでは通りすがりに見ず知らずの方から「Hola Amigo!(友達よ)」と声をかけられ、会話が始まる事があります。パラグアイ人は人懐っこい方が多いです。まさに、Amigo(友達)の文化であり、その



写真8 伝統的なおやつ「チパ」



写真9 パラグアイ文化の象徴の一つ「テレレ」セット



写真10 4年間一緒に生活した仲間たち(2008年12月)

象徴の一つがこのテレレの回し飲みではないでしょうか。

長年、パラグアイのプロジェクトに参加したことで、多くのAmigo(友達)ができました。典型的なラテン気質で、人懐っこい方が多い国です。海外業務に従事して以来、中南米、アフリカ、アジアと色々な国のプロジェクトに参加してきました。その

中でもパラグアイには特別な思いがあり、到着するとなんだか落ち着く、そんな不思議な感覚にさせてくれる国です。

日本からブラジルを経由して約35時間かかる、最も遠い地球の裏側の国ですが、非常に親日的な国でもあるパラグアイ、機会があれば是非訪れてみてはいかがでしょうか。